

モニタリングサイト1000 ガンカモ・シギチ 通信

メダイチドリ

2009年9月号

調査報告

2008-09年のガンカモ調査結果

神山和夫

2008～09年に行われたモニタリングサイト1000ガンカモ類調査やその他のガンカモ類の調査データを総合して、いくつかのトピックスをご紹介します。

1. ヒシクイは分散して越冬か？

ヒシクイの越冬状況については、前年に比べて変化が見られました。図1は調査地の最大個体数を県ごとに合計した値です。サイトごとの調査日が異なるので正確な総数ではありませんが、大きな傾向は把握できていると思われます。この結果によると、亜種オオヒシクイの数が新潟県で減っていました。昨冬は1月に新潟で積雪が多かったために、水田で採食しにくくなったオオヒシクイが他地域に移動したのではないかと考えられます。一方、宮城県や山形県のオオヒシクイの数には変化がありませんでしたが、宮城県の化女沼が最大の越冬地になっている亜種ヒシクイは前年の約半分に数が減りました。今年は山形県の上池と下池で普段の年より多くの亜種ヒシクイが見られたので、化女沼のヒシクイの一部が移動していたのかもしれませんが。ただし2008～09年の宮城県の積雪は多くなく、気温はむしろ前年よりも暖かかったため、亜種ヒシクイが移動したと仮定し

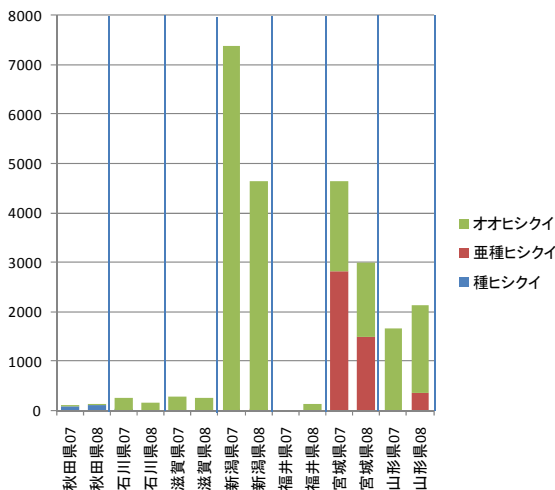


図1: 07～08年/08～09年の12～1月のヒシクイ個体数 (モニタリングサイト1000 ガンカモ類調査)

ても、その理由はよく分かりません。



写真1: オオヒシクイ (篠原善彦)

2. オオバンの分布状況

次に、オオバンの調査結果を紹介します。オオバンは一年中日本で見られる鳥ですが、冬になると北から渡ってくる個体がいるため、春夏に比べて数が多くなります。オオバンの数が近年増加しているらしいことが指摘されていま

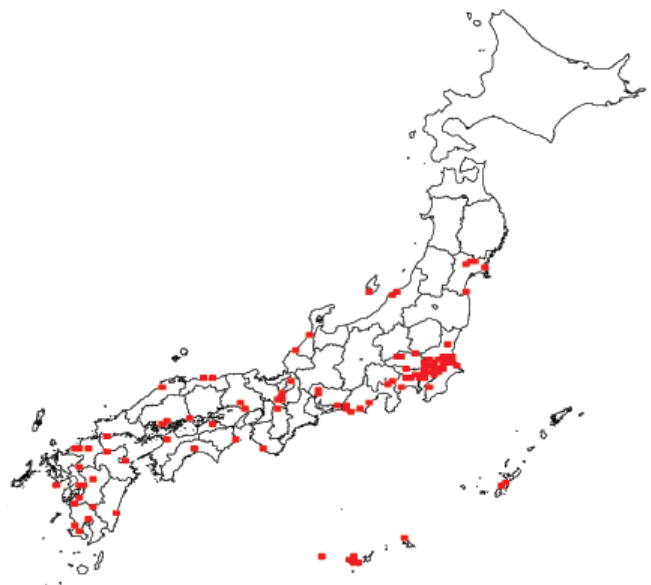


図2: 1986～87年越冬期にオオバンが確認された二次メッシュ (第3回自然環境保全基礎調査)

すが、全国規模でオオバンの生息状況が分かる調査は1986年に環境省が実施した第3回自然環境基礎調査の越冬鳥アンケート以降は行われていないため、オオバンの現状を知るためのデータは不足しているのが現状です。この1986年の調査では、関東ではよく見られるものの、他の地域では分布が限定的でした(図2)。

図3～5は2007～08年のモニタリングサイト1000、渡り鳥飛来状況調査(※1)、そしてモニタリングサイト1000ボランティア調査地のデータから作成した図です。調査地点が限られていて、しかも沿岸部に偏っているのが1986年との比較



写真2:オオバン(渡辺美郎)

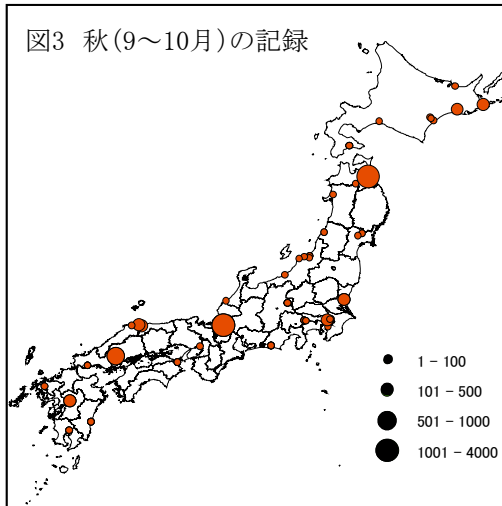


図3 秋(9～10月)の記録

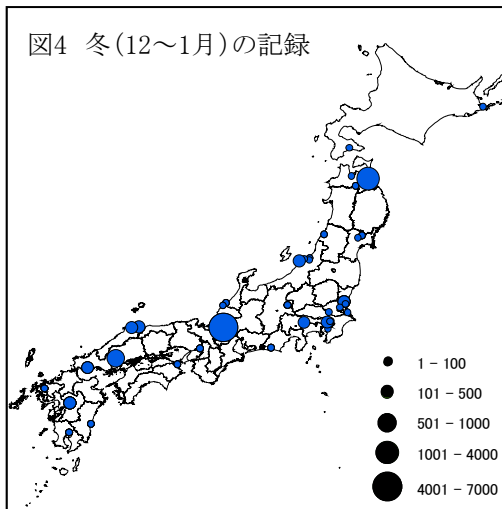


図4 冬(12～1月)の記録

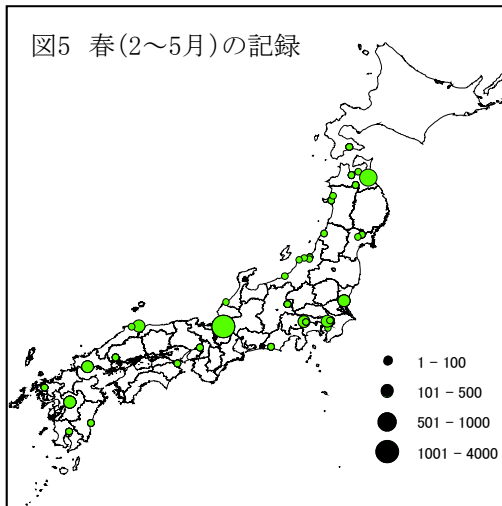


図5 春(2～5月)の記録

図3～5: 2007～08年のオオバンの記録地点と数 (モニタリングサイト1000、渡り鳥飛来状況調査)

はできませんが、少なくとも分布域が狭まっていることはなさそうです。数の多い場所を挙げると、小川原湖で1月に1920羽、琵琶湖でも1月に38564羽が記録されています(琵琶湖は越冬期だけの調査のため図3～5には含めていません)。特に琵琶湖では、最近の個体数の増加が顕著で(図6)、カモの仲間を押さえて琵琶湖で最も数の多い水鳥になっています。モニタリングサイト1000に登録されている記録は2004～05年以降の短い期間しかありませんが、琵琶湖以外の調査地ではこのような急激な増加は見られていません。

一方、渡り時期の記録を見てみると、北海道東部では秋によく出現していますが、春にはほとんど出現がありません。春はエサになる植物が少ないため北海道での滞在期間が短くて記録に現れなかったのか、あるいは秋と春とで渡りの経路が異なっているのかもしれませんが。

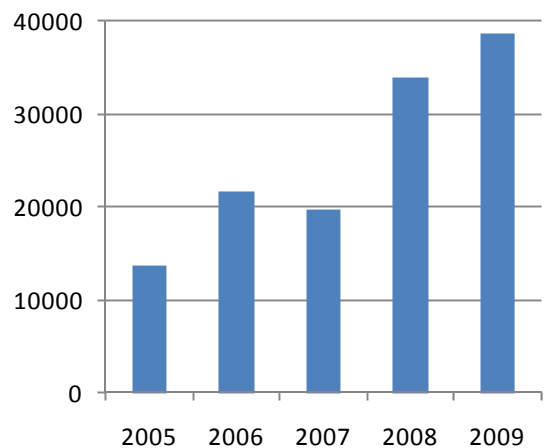


図6: 1月の琵琶湖のオオバン個体数 (モニタリングサイト1000)

※1 渡り鳥飛来状況調査

環境省が鳥インフルエンザの防疫対策などのために行っている個体数調査です。 http://www.env.go.jp/nature/dobutsu/bird_flu/migratory/ap_wr_transit/

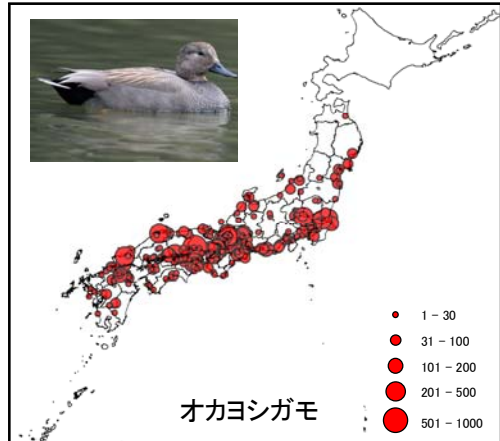
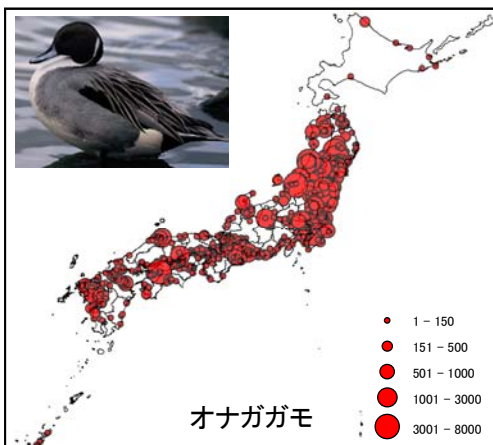
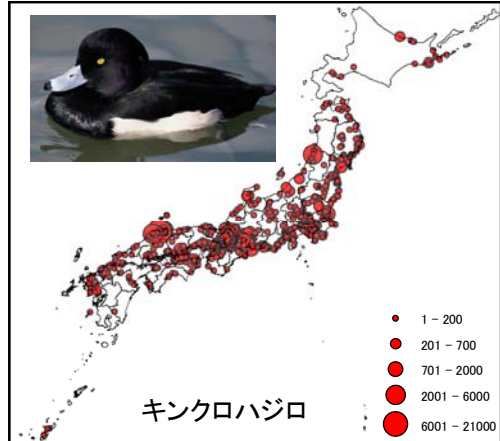
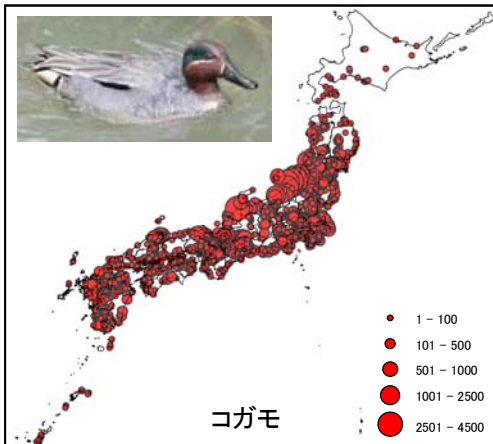
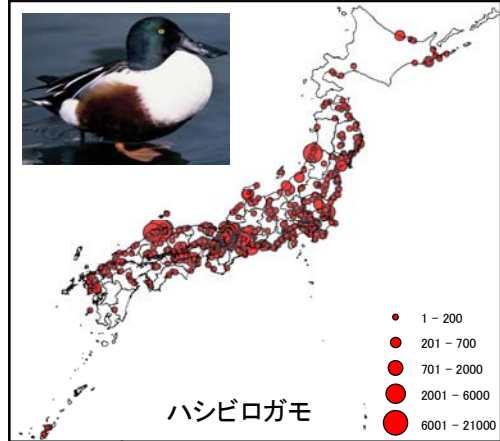
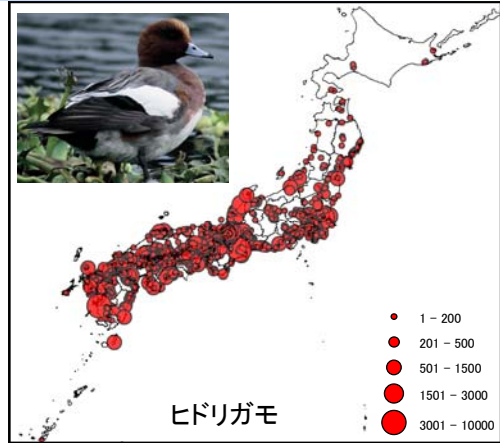
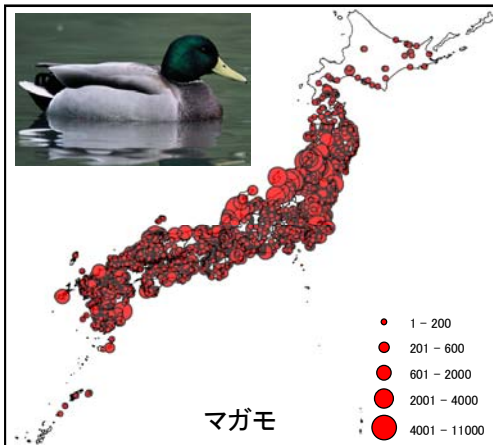
※2 ガンカモ類の生息調査

環境省が毎年1月に都道府県の協力により実施している全国のガンカモ類のカウント調査。

3. カモ類の越冬分布

個体数調査のデータを使ってカモ類の分布図を作ってみると、地域により数の多少があることが分かります。このページでは、2008年1月のガンカモ類の生息調査(※2)の記録から作成した分布状況をご紹介します。なお北海道は調査地が少ないため、本来の分布を反映していない可能性もあることにご注意下さい。

本州以南のどこにでも多いマガモ・コガモと北日本に多いオナガガモを除くと、ここで挙げた以外にも、カモの仲間には関東以西が越冬の中心になっている種が少なくありません。ヒドリガモやオカヨシガモのような植物を主食とする種は暖かい地方に多いようです。



この他のガンカモ類の分布図は、渡り鳥飛来状況調査の報告書でご覧になれます。

http://www.bird-research.jp/1_katsudo/waterbirds/gankamo/hirajokyo.html

カモの写真は渡辺美郎氏撮影

新サイト紹介

宮崎港一ツ葉入り江と鳥類

三浦知之

宮崎市の中心から東へ4kmには、大阪からのフェリーが着く宮崎港があります。この一帯は1987年まで長さ3km総湿地面積695haを誇った大きな入り江で、ヘラシギや数千羽のカモ類が飛来し、ウナギやシジミの漁業と料理、小学生の遠足や運動会などで市民にも親しまれていました。しかし、宮崎港の開発で岸壁・道路・公園に変貌し、現在はわずかに北端部9.6 haが残されているに過ぎません。これが一ツ葉入り江です(図1)。周辺には阿波岐原森林公園のクロマツが11km広がり、1987年にリゾート法適用の第1号としてシーガイア、ゴルフ場およびホテルが建設され、2001年に経営が破綻、2008年にはシーガイアの閉鎖という、バブル経済崩壊を象徴する所でもあります。

2001年6月、鹿児島大学から異動して間もない筆者が家族との散策中に、この小さな入江に遭遇しました。干出面積がわずか5haの干潟でもあり、学生のいない初年度は、独りで調査ができる入江に通うようになりました。その後、多様な生物が少しずつ明らかになり、2009年7月までに甲殻類63種、貝類61種、魚類13種、鳥類67種を記録しました。中でも、ヒメシオマネキ(図2)の繁殖が日本本土で初めて確認され、未記載の巻貝イリエゴウナの生体も初めて採集されました。

宮崎市の北には一ツ瀬川が流れ、こちらは現在も総湿地面積756haの河口汽水域があり、クロツラヘラサギの越冬



図2: 南西諸島では普通種のヒメシオマネキ



図1: 宮崎市の海側上空から見た一ツ葉入り江(矢印)

地として全国的にも知られています。宮崎県内の貴重な海岸湿地は全国的には全く知られていませんので、できれば他の機会に紹介したいと思います。

1. 一ツ葉入り江の鳥

冬季のカモ類は大淀川や一ツ瀬川水系に千のオーダーで飛来しますが、一ツ葉入り江は小さく、マガモ・カルガモ各300程度までしか記録されません。シギチドリ類では概数としてハマシギ250、チュウシヤクシギ100、キアシシギ30、シロチドリ・ソリハシギ・アオアシシギ各10までが観察されます。留鳥のシロチドリと冬鳥のハマシギを除いて旅鳥ですが、キアシシギは夏鳥として良い出現状況です。他に20種ほどのシギチドリが出現します。他の鳥では、コアジサシの年変動が激しく、時に入り江の砂嘴部分に営巣します。冬はズグロカモメが滞留し、今期は標識も確認されました。さらに、カラシラサギ(図3)は2007年以降、初夏と秋に1週間程度滞留しています。



図3: 朝日の中のカラシラサギ (2008年10月8日)

2. 鳥の餌場としての入り江

一ツ葉入り江での調査は当初から、生物相と物質循環に焦点を合わせていました。そのため、飛来鳥類の採餌の様子や餌となる生物の分布も併せて検討してきました。予備調査で糞を分析したところ、多毛類の剛毛だけが高い頻度で見つかる反面、よく捕食されるカニ類はほとんど見つかりません。多毛類は外骨格を持たないため、鳥は丸呑みして

いると思われ、餌の組成は推定できませんが、量的に把握することは不可能でした。鳥類では一部の未消化物をペリットとして口から排出するため、糞分析では丸呑みの餌だけが過大評価されます。同一個体の糞とペリットは2002年7月2日のチュウシヤクシギ1個体で観察できました。この個体の糞からはコメツキガニの左鉗脚2(カニ2個体に相当)が、ペリットからは左鉗脚14、右鉗脚14脚およびニホンスナモグリ1が得られまし

た。この例から、正確な餌生物の同定と量的な把握には、ペリットが適していることがわかりました。また、特徴的な鉗脚が残りやすく、干潟生態系の両端を繋ぎ、かつ量的な把握もできそうなカニ類を中心に分析を進めることにしました。1例を示すと、一ツ葉入り江には最高時約200万個体のコメツキガニが生息しています。他方、2002年10月9日に得られたハウロクシギのペリットには左鉗脚156、右鉗脚165が含まれていました。一ツ葉入り江へのハウロクシギの年間の平均飛来数は17個体/日であり、コメツキガニを年間約2800個体食べていることになります。他方、シロチドリのパリットと糞には鉗脚4が確認できる程度ですが、留鳥であり、年間8300個体食べると推定できます。こうして、コメツキガニの捕食を確認した12種の鳥類では、年間消費量が8～10万個体となります。

3. 最後に

一つの湿地に着目し、そこに流れる命の環を徹底的に見つめていこうと考えていたのですが、たかだか10haでもその奥深さは未だに計り知れません。また、人為(漁獲、薬剤散布、埋め立てなど)の影響に比べれば、干潟食物網の最上位にいる鳥ですら、取るに足らない数値であることを気づかされました。野鳥に必要な余裕のある自然の大きさが

が見えてきます。逆に、野鳥を保護するための湿地保全が如何に大変かを思い知らされています。調査協力を始めたばかりですが、今後とも皆様のご指導とご鞭撻をお願い申し上げます。



図4: 毎年行われている干潟の観察会

執筆者

三浦知之 宮崎大学農学部 教授



今年3月に、加計呂麻島で撮影したものです。

学生の卒業旅行にここ2年ほど奄美を探索しています。サシバが目と鼻の先に飛んでくるのですが、学生は足下ばかりに気を取られ、そっちも面白いのですが、先生の方は、目が休まりません。

専門: 海洋生物環境学

<http://www7.biglobe.ne.jp/~higata/>

おしらせ

2009年度 モニタリングサイト シギ・チドリ類等調査 交流会 in 沖縄

モニタリングサイト1000では、毎年、各地でシギ・チドリ類調査員の交流会を開催しており、今年も沖縄県那覇市で開催いたします。

今回は、沖縄・南西諸島のシギ・チドリ類や干潟に関する話題を中心に話題提供していただきます。また交流会では、調査サイト間の情報交換を通して調査員のネットワークを広げることも目的としています。いろいろな人と出会い、知見を吸収していただける場となれば幸いです。

また、翌日にバードリサーチや地元団体などが企画するエクササイズを泡瀬干潟などで行う予定です。

調査員以外の方でも自由に参加していただけます。

皆様、ぜひ参加をご検討下さい。

●開催日と会場

開催日: 2009年11月15日(日)10:00~17:00 (9:30開場)

会場: 沖縄県市町村自治会館4F会議室

(沖縄県那覇市)

参加費: 無料 (懇親会は別途)

詳しくは以下のサイトをご確認ください。

http://www.bird-research.jp/1_event/shigichi2009_11.html

沖縄のモニタリングサイト

現在、沖縄には沖縄本島、宮古島、石垣島に計8カ所の調査サイトがあります。

沖縄地域の湿地の特徴はサンゴ礁の礁湖に形成される干潟と汽水域のマングローブがあることです。くわえて、日本の最南部に位置することや大陸に近い地理的な条件から、他地域の干潟や湿地とは、ちょっと変わった種構成となっていて、九州と較べても冬期はムナグロが多く、ハマシギが少ないなどの特徴があります。

この機会に、ぜひ沖縄のサイトをご覧ください。



図: 沖縄のモニタリングサイト位置

観察報告

○コキアシシギ

英: Lesser yellowlegs 学: *Tringa flavipes*

観察記録

本種は1999年8月28日茨城県東町佐原組新田(現在は稲敷市)で観察されて以来、茨城県下で9年ぶりに昨年8月23日同県茨城町下石崎で観察されました。その後同月25日から利根町福木の休耕田に移動し、コアオアシシギやツルシギ等としばらく滞在して、その間猛禽の攻撃を受けて負傷しましたが最終的には9月4日に飛去しました。茨城県では過去にも観察記録が数例あり、1992年より4年間続けて観察されています(池野・福田等)。利根町に滞在中はコアオアシシギと行動を共にして数か所の休耕田で採餌をしていました。

本県の過去の観察場所は内陸の休耕田や蓮田が多く、観察例は幼鳥が殆どです。



写真1: コキアシシギ(中央手前)
と2羽のコアオアシシギ

飛来地環境

茨城県に飛来した時はすべて冠水休耕田で、中型のシギであるため水位があるところに入る可能性が高くなっています。内陸がほとんどで海浜や干潟に入ることはありませんでした。

飛来時期

過去の飛来時期を調べると殆ど8月中旬から下旬にかけて冠水休耕田に飛来しています。

識別のポイント

大きさは230~250mmで中型のスリムな感じで、長いオレンジ色の脚が特徴です。嘴は細くて黒い、目の周りは白いリングが目立ちます。背は濃褐色で白い斑点が目立ちます、頭部は幼鳥の場合少し灰褐色です。

首には細い縦斑が走り、腹部下面は白いのが特徴です。尾は褐色の横斑が見られます。鳴き声は普通1声か2声で“tew-tew”と鳴きます。コアオアシシギと一緒に採餌して

いることが多いようです。タカブシギによく似ていますが脚の長さやオレンジの色合いで体型が違いますので識別はそれほど難しくはありません。

繁殖地はアラスカからカナダ東部で越冬地は中米から南米に移動します(図1)が、迷鳥として日本や豪州に稀に飛来します。2004年以降のモニタリングサイト1000の記録では、宇佐海岸と河北潟でともに秋に記録がありました。



写真2: コキアシシギ(茨城県)

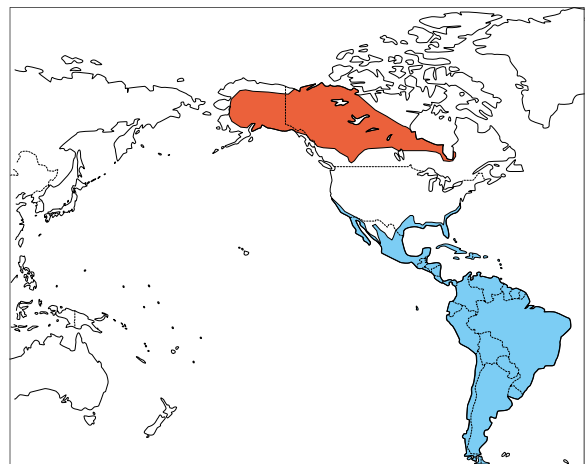


図1: コキアシシギの分布図 ■ 繁殖地 ■ 越冬地
(The Cornell Lab of Ornithology All About Birds
Lesser Yellowlegsのホームページを参考に作成)

執筆者

明日香治彦



茨城県鳥獣保護員
霞ヶ浦河川モニター
筑波・霞ヶ浦自然公園指導員
日本野鳥の会茨城支部会員
採鳥歴25年
退職後は茨城県南部利根川中流域のシギチドリを始めとして毎日フィールドに出かけて鳥を探して楽しんでます。

モニタリングサイト1000 ガンカモ・シギチ通信 2009年9月号(4号)

発行: 環境省自然環境局生物多様性センター <http://www.biodic.go.jp/moni1000/>

制作: 特定非営利活動法人 バードリサーチ <http://www.bird-research.jp/>

電話/Fax: 042-401-8661 メール: br@bird-research.jp



モニタリングサイト1000

このニュースレターは持続可能な森林管理が行われている森の木材から作られたFSC認証パルプを100%使用した用紙で印刷しています。FSC認証制度についてはこちらのHPをご覧ください。 <http://www.forsta.or.jp/>